

外務大臣賞

寄り添った支援を一步ずつ

大阪府立箕面高等学校 2年 箱田 晴大

頬が痩せこけ、肋骨がくっきりと浮き出た弱々しく小さな体。心が傷ついた子どもたちの瞳からは輝きが失われ、生きる希望を感じられない。小学三年生の時に見た一冊の本に載っていたアフリカの子どもたちの写真だ。自分よりも小さな子たちが、自分の知らないところで、こんなに辛い生活をしていることに衝撃を受けたことを今でもはっきりと覚えている。だからといって、当時の私は漠然と「平和になればいいのに」と思いながらも、行動に移すことはなく、日本で当たり前のように学校に通い、友達と遊び、ご飯を食べ、安心して家族のもとで暮らしていた。

中学三年生、高校進学選択の時。将来何がしたいのかを考えた時に、あの日見た写真と気持ちを思い出した。「アフリカの子どもたちを助きたい。」以前より現実味がある。海外進学をして開発学を学ぶため、グローバル科のある高校へ進学した。

自分が人を助けることはできるのか自信はなく不安だったが、「とにかく行動を起こす」が私のモットーである。先生の勧めで、イギリスのマンチェスター大学がオンラインで行う「開発途上国における公衆衛生」という講義を受講した。そして、ケニアで発生している水不足や水質汚濁の原因が、自分の生活に関係しているという思いがけない事実を知り、動揺した。現代の生活では、決して手放すことのできないスマートフォンやパソコン。そこには、衛生環境が整っていない鉱山で採られたレアメタルが使用されている。環境整備が十分に行われていないため、鉱山から有毒な物質が川や海に流れ出る。それによって、水質汚濁やその他の公害が発生し、多くの人々が犠牲になるというわけだ。

この講義をきっかけに、「安全な生活用水を確保できるよう、ケニアに水道設備を建設したい」と考えた私は、友人と学生任意団体を発足し、クラウドファンディングによる水道設備の建設に協力してくれる方を探すために NPO・NGO 団体にメールを送り続けた。が、高校生の活動を支援する余裕も時間もないという理由で断られ続けた。そんな時、唯一、協力してくれると連絡をくれたのが認定 NPO 法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパンだった。メールには、「社会問題を自分ゴトとして考え、アクションを起こす社会を若者自身が創り上げていくことを応援します」と書かれていた。よし、一歩前進。支援を募るため、ウェブサイトを作成し、YouTube にも動画を投稿した。こうして集まった資金を現地で活動している方々に託し、自身の目標であった水道設備の建設が行われる運びとなった。

しかし、「本当にケニアの人々の想いに寄り添っていたのだろうか」私は、自問自答した。水道設備の建設により、川や海の水を用いて自然と共存して生きるという本来あった伝統の継承を無視してしまっていないだろうか。ならば、水質汚濁自体をなくせばよいのではないか。そのためには原因となるレアメタルを使用している電子機器を買わなければ良い。いや、それでは鉱山で働く人々の仕事を奪うことに繋がりがかねない。しかもこの便利さを知ってしまった私を含む社会が、電子機器のない生活に戻ることは不可能だろう。どうすることが彼らのためになるのか、答えが見つからない。だがきっと、一つだけの模範解答はないのだろう。

行動し、失敗する。そして、何度も考えながら新しい方法を試みる。そうすることで、今まで見ることができなかった問題や解決策に出会うことができると私は考える。支援する側、支援される側ともに持続可能な生活を送ることができる均衡のある本質的な支援を見つけない。そのために、開発学を真剣に学び、ケニアに足を運ぶ。そして、実際に現地の人々の想いを聴き、彼らの生活を守る手助けをする。それが私の目標である。